

朝日新聞連載：子どもへの性暴力 第56回

「施設長の送迎嫌や」放課後デイで2年半、娘は性暴力を受け続けた

デジタル配信：2022年7月20日 18時00分

<https://digital.asahi.com/articles/ASQ7G6DGPQ7GTIPE01G.html>

(事例は省略しています)

8年で5倍に増えた放課後デイ、虐待件数も増加



放課後デイサービスで積み木をする子ども。ホワイトボードに書かれた課題を見ながら、その通りに積んでみる、という訓練でもある＝鈴木章之さん提供



放課後デイサービスで職員とカードを使って遊びながら学ぶ子ども＝鈴木章之さん提供

厚生労働省によると、放課後デイサービス事業所は、各都道府県に対して申請し、児童福祉法に基づく人員配置や設備などの基準を満たしているかの確認を受けた上で指定される。

実施しているサービスの点数換算に応じて、国から報酬が支払われる。

放課後デイの事業所数は、制度が始まった2012年度には約3千だったが、20年度には約1万5千に増えた。

利用者数も、同じ期間で約5万4千人から約24万3千人に大幅に増えている。

一方、放課後デイで起きた虐待件数も増えている。

12年度は1件だったが、20年度には92件に上った。20年度ではうち14件が性的虐待だった。ただ、性的虐待は発見されにくく、氷山の一角と指摘する声は少なくない。

厚労省では、これまで努力義務だった、従業員への研修や虐待防止のための責任者の設置を今年4月から義務化した。

厚労省の担当者は「研修の義務化により、虐待が起こりうるということを広く意識してもらうことが大切だ」と話す。

報酬の構造的問題、背景に

事業者団体も現状に危機感を抱く。

「障害のある子どもの放課後保障全国連絡会（全国放課後連）」の田中祐子事務局長は「質が担保されていない事業者が増え、逆にきちんとやっているところが窮地に立たされている」と話す。

質の低下の背景には、放課後デイの報酬の構造的な問題があるという。

放課後デイの報酬は、基本報酬のほかに理学療法士などを加配した場合に配分される加算がある。

3年に1回の報酬改定により、基本報酬は下がる傾向にある一方、ケアニーズの高い子どもへの支援を評価するといった加算配分が手厚くなっている。

田中事務局長は「加算をとるための事務手続きは、現場の仕事で手いっぱい事業者にとっては負担の大きいもの。現場の実情に合っているとは言い切れない」と指摘。どうすれば加算をとりやすくなるか、といった民間会社によるセミナーもあるといい「利潤追求型の事業所が増えている」という。

国が障害者福祉施設などにおける虐待の防止と対応についてまとめたガイドラインでは、性的虐待について「利用者と2人きりになる場面を見計らって虐待を繰り返すといった悪質な事案がある」としている。

ただ、田中事務局長によると、パニック状態になった子どもを落ち着かせる時や、心を許しているスタッフが対応しなければならないような場面もあるため、1対1での対応が必要な時もあると指摘。2人きりにならないように対応することには難しさもあるという。

川崎市の放課後デイ「心花(こはな)すげ」の管理者、鈴木章之さん(55)も、制度の課題を指摘する。



放課後デイサービスで過ごす子どもたち=鈴木章之さん提供



自分たちで作ったレジ(手前)を使って遊びながら学ぶ放課後デイサービスの子どもたち=鈴木章之さん提供

子どもが「いや」と言う体験を

放課後デイを担当するのは厚生労働省の障害部門のため、12年の当初は、そもそも管理責任者になる要件が、高齢・障害分野での実務経験だった。児童・障害分野での実務経験に変更されて児童分野の職員が採用されるようになったのは17年だ。

また、現場の職員は当初は実務経験は不要だった。17年からはやっと児童指導員などの児童・障害分野での実務経験が必要とされるようにはなったものの、質の担保が課題だという。「人材不足もあり、教員免許や大学での社会学専攻など児童指導員の資格要件に該当すれば面接で事実上落とされることなく採用されている。最近では、問題を起こして働けなくなり、地域を変えて働こうとする人が少なからずいる」と指摘する。

鈴木さんの施設では、子どもの発達などについての職員研修に力を入れる。

発達に課題を抱えている子どもは、小学生でも抱っこを求めてくることが多い。求めに応じて抱っこが必要なときもあるが、職員には通常は腕一本の距離を意識させている。

また、ふだんから子どもと大人を1対1にさせないことに最大の注意を払う。送迎車には360度ドライブレコーダーを設置し、客観的な記録をとるようにしている。また、スマホの位置情報確認によって送迎車がいつでもどこにいるのかもわかるようにしている。

一方、子どもたちにはふだんから、水着で隠れる体の大切な部分である「プライベートゾーン」の話をして、「プライベートゾーンを見たり、触ったりする人がいたら、すぐに大人に言うように」と伝えている。

性の問題に限らず、いやなことは「いや」と言う体験を重ねる努力も続ける。

たとえばケンカをした相手が謝ったとき、子どもに無理に「もういいよ」と言わせない。まだ許せないなら、少し時間をおけばいいという実践だ。

そうした積み重ねが、いざというときに子どもたちが「いや」と言えることにつながると、鈴木さんは考えている。

(藤野隆晃、島崎周、編集委員・大久保真紀)



かまってほしくて職員の脚に抱きついてくる子どもたち。放課後デイサービスではよくある光景という＝鈴木章之さん提供
(画像の一部を加工しています)



鈴木章之さんは「専門性のある人をどうやって放課後デイサービスの現場に増やすかが課題」と語る
2022年4月11日、川崎市、大久保真紀撮影